

## 「吉新治夫牧師のご逝去」

2015年03月16日

私の母教会（大分県 杵築教会）を隠退されていた吉新治夫牧師が10日（火）、肺炎で85歳の生涯を終え、天に帰られた。お別れのため急遽帰郷し、納棺式、前夜式、出棺式、そして告別式に列席することができた。杵築教会は全ての式を、悲しみの中で、心を込めて執り行った。告別式には百人を超す方々が見え、会堂は溢れるばかりであった。私は、告別式で吉新先生への感謝の思いを込めて弔辞を述べた。

先生との出会いは、私にとって人生を決定づける出来事であった。先生との出会いがなければ、現在の私はない。高校生の頃、青春の嵐に襲われ、生きる意味と方向を見い出せず、悶々ともがいていた。救いを求め、お寺に通い、住職の教えを受け仏教を学んでいた。ある時、住職から「秋吉君、キリスト教を知っているか」と言われた。早速、教会を訪ね、初めて、牧師という人に出会った。若くてハンサムで、体格の立派な人であった。先生の部屋に案内され、本の多さに驚き、牧師はこんなに勉強する人なのかと感嘆した。先生は「キリスト教を知りたいのなら、聖書を読みなさい」と言って、聖書を貸してくれた。初めて聖書を読んだ。冒頭の「初めに、神は天地を創造された」という言葉に触れ、こんな思想があるのかと仰天した。私の知る神々は人間や自然の延長線上にある神々であり、通っていた臨濟宗のお寺の教えは仏教哲学であった。聖書は、初めに、神が天地を創造したと、全歴史を支配される超越した全能の神を提示していた。私は、住職に「聖書には『初めに、神は天地を創造された』と書いてあります」と言ったところ、涼しい顔をして「それでは、天地を創造した神は誰が造ったのかね、大神様かね」と言われた。私は時間に関する考えが全く違うと思った。仏教では初めがない、初めがないことは終わりがないことになる。それは循環する「無常」という時間論になる。「無常」という真理に身を委ねていくところに「覚者」という悟りの境地があると言う。私は、結んでは消えるあぶくのように流される「私であること」を受け入れられなかった。キリスト教は神が初めを造り、終わりをもたらず。その支配の中に、極小ではあるが、私の生が位置づけられる。主イエスの十字架と復活は「あなたはあなたであっていい」と是認してくださっている。私のような者でも生きていいのだ、神は私を認め、主イエスを通して「生きよ」という愛の中に置かれている福音を知った。吉新先生は私のしつこい質問に丁寧に答え、本を紹介し、この福音を教えてくださいました。暗闇しか見えなかった前方に光が差し込み、虚無に取り囲まれていた私は生きることへの希望と勇気が与えられ、人生は一変した。私は、先生が行かれた神学校に行き、牧師になり、福音を伝道する者になりたいと思った。そして、貧しいながらも、その道をひたすら歩んできた。先生との出会いとご指導によって「私であること」が喜びに変わった。

先生は結婚されず、53年間、杵築教会に仕え続け、全てを献げられた。少人数の教会員で、考えられないほどの大会堂を献堂された。また、幼児教育に心を注ぎ、その影響は町の中に深く刻まれた。そして、教会図書に購入した蔵書の数は半端ではない。絶版の本は杵築教会に行けば、読めるといわれるほどの蔵書である。キリスト教の文化を根付かせたという思いがあったからである。先生はご自分のためには何も残さず、空手で天に帰られた。先生ほど無欲な牧師はいない。

私は、色々な先生と出会い多くを教えられ、本当に幸いであった。中でも、吉新先生は私の人生を決定づけた最大の恩師である。先生のご逝去は悲しく、寂しい限りであるが、心からの感謝を申し上げ、先生に倣う者でありたいと願っている。